

会報六月号 世界観を掴む(その二)

目次

- ・ 陰陽は極まりて反転する
- ・ 幸福への教育
- ・ 世界観を掴む
- ・ 世界の構造と秩序

● 陰陽は窮まりて反転する  
数十年来の稽古の方針が（陰）から（陽）に反転した。稽古だけではなく物事全般に対する姿勢と言ってもいい。

これまでは「なにもそこまで」「苦しさに耐える」「稽古は命のやり取り」であった。生命燃焼の為の死の哲学である「葉隠」の言葉がこの姿勢の裏書となっていた。しかし、葉隠を通して山本常朝の魂に触れて、別のものを掴んだ。それは「死は生を支えている」ということだ。そこから物事に取り組む姿勢が変わってきた。「苦しさに耐える」から「楽しく貪欲に」と。従って、楽しくない稽古、笑えない稽古ではダメである。また、研究心、向上心の無い稽古もダメである。

「楽しい」の語源は、赤ちゃんの「手伸ばし」。それは心が感じて身体が動くこと、心が震えて身体が動くことである。自分を欺かないこと（誠意）。神（宇宙の秩序・生命の原理・陰陽相補原理）に率（したが）う喜びを表現した踊りである。そして、心が震えるところに自然と笑いは出る。

楽しむには、真摯に取り組むことである。それは宇宙の秩序に則って全力を尽くすことである。この姿勢を「葉隠」は「死狂い」と言い、宮本武蔵は「神仏を敬い、神仏に頼らず」と言った。葉隠は成功という結果を求めてはいない。ひたすら「死狂い」という姿勢に生き、死ぬのである。それは、生命燃焼の為に楽しみ笑うのであり、楽しみ笑う為に生命を燃焼させ尽くすのである。

自己実現とは自己超越の中にしかない。自己超越とは、己を忘れるところ、夢中、没頭、無私という姿勢そのものである。それが「死狂い」の姿勢である。なぜ「死狂い」が自己実現になるのか。それは、その姿勢の中にこそ、本当の自分が現れるからである。そこに生命の燃焼があり、楽しみがあり笑いがある。だから葉隠は「武士道とは死ぬことと見つけたり」「武士は命を惜しまぬに極まりたり」と説く。死は生を

支え、生命燃焼を促進させる。死狂いとは楽しく貪欲なものである。

### ●幸福への教育

己の生命を燃焼し尽くすことができるのは楽しく幸福であろう。一般的に言って幸福とは、精神的・肉体的・社会的な健全性である。それを生理的に言えば「健康」であり、心理的に言えば「幸福」であり、本質的に言えば「自由」である。それを知能で見れば「真」となり、意志で見れば「善」となり、情緒で見れば「美」となる。

「中庸」はこれらを「誠」と呼ぶ。

幸福の度合いは、世界・大自然・人生の根本原理(陰陽相補原理)に対する理解の深さと、その原理に則った思考・行動の方向性に比例する。この観点から言えば、もしも幸せでないとしたら、厳しい言い方だが、それは本人の無知・無理解・思考・行動の罪である。

しかし、これはできるだけ回避しなければならない。その一助の為に教育があるとすれば、教育の要諦とは、この世に生まれてきた者に「この世を乗り切る条件」を伝え、以て人生の幸福に寄与する点にある。この条件の中でまず大切なことは、この世の「原理・構造・成り立ち・道筋」を知って「世界観」を掴むことである。

従って、「教育」の第一義は、世の中の「根本原理」を知って、自らを健康・自由、そして幸福へ向かわせる「正しい判断力」と「元氣(氣力・骨力)」を養うことにある。様々な専門知識や技術の習得も必要であるが、それらは「世界観(根本原理)」「判断力」「元氣」の上に成り立たせるべきであり、二義的なものである。

根本原理を知って世界観を掴み、判断力を磨き、様々な知識や技術を習得しながら、生命を燃焼させ尽くすのである。

### ●世界観を掴む

世界観というのは、世の中の根本的な原理であり、多方面に通用する原理であって、全て(形而上と形而下)を統一し、従って、物と心の同一性をさえ示すものである。実際の運用から言えば、精神(非物質・無限)と肉体(物質・有限)を持つ人間の生命を燃焼させ尽くす為の指導原理となるものである。

ここで幾つか疑問が生じる。そもそも、この世界で生きていく時、世界の構造や秩序や、そこにはたらく根本原理を知らずに、生命を燃焼させ尽くすことが可能だろうか。また、世界観とは人により異なるのだろうか。社会により民族により時代により異なるのだろうか。「色んな見方がある、色んな考え方があるんだから、世界観は人の数だけある」というのも分かる。しかし、世界が一つなら、世界観、つまり世界の根本原理というものは一つではないか。様々な見方や価値観から生まれるのは、様々な「世界論」であって「世界観」ではない。様々な世界論は、やがて抽象化され、統合一されて根本的な原理を導き出していく。様々な世界論の先に到達したものが、それが「世界観」である。だから、いくつも世界観があるというものではない。

つまり、世界観とは、生命観、人生観であり、発展しながら様々な応用展開できると同時に普遍的であり、簡潔で皆の実用になる、この世の根本的な原理である。

#### ●世界の構造と秩序

世界観というのは、「この世界の構造と、その秩序を支える原理である」として話を進める。私たち人間がこの世界に生きているということは、そこに構造（秩序）と原理に支えられているからである。これを「生命とは何か」という視点から紐解いてみる。

まず、三重の円を描いてみてほしい。その一番外側の円（第一段階の世界）から順に説明を始める。



生命には三つの段階の世界がある。

第一段階の世界は宇宙。無限・永遠の広がり、絶対・太極・全き一の世界である。

第二段階の世界は、その無限の広がり、自らの遠心性が原因で二つ（陰陽）に分化していく。その分化したものの同士が交わり衝突することによって、螺旋や循環が生じる。それは陰（遠心力）と陽（求心力）の二極を持つ場を生み出し、そこからエネルギーの場が生じる。エネルギーは素粒子を生み出し（ビッグバン）、そこから原子分子が生じ、それが集まりとなって巨大になり、やがて宇宙に天体をつくり出す。その一つが天の川銀河であり、ついに太陽系が生まれる。また、無数の銀河が不断の創造・維持・破壊という再生産を繰り返していく（造化）。これが物質の世界、無機物の世界、死の世界である。

第三段階は、この無機物の世界（宇宙）から生じた有機物の世界である。そして、有機物の中の微細な一部が、生物の世界を構築していく。当然自然発生（無限・永遠の広がり・絶対・太極の世界↓陰陽二極が生じ↓エネルギーが生じ↓素粒子↓原子分子↓天体↓不断の創造・維持・破壊の再生産↓有機物↓生物の世界）である。これら三段階は繋がっていて単独のものではない。全ては宇宙（無限）の一部（有限）であ

る。

第一段階の宇宙に分化はない。私たちが際限なく夢や理想や憧れや自由を抱くことができるのは、この第一段階の宇宙（絶対、無限、永遠、全能等）を根源、本体、生命としているからである。我々は宇宙の秩序、生命の原理に抱かれているのである。

私たちの記憶は幼児期以前をはっきり描いてはくれないが、それ以前の記憶が存在しないとは言えない。無限の昔から記憶があることを否定することはできない。では、なぜ幼児期以前の記憶は漠然としているのか。それは第一段階の宇宙が無限・絶対であり、有限・相対という差別相が無い。従って、我々の五感では捉えられない。

第二段階は無数の銀河の世界であり、物質の世界である。第一段階の世界は無限であるが、ここから有限の世界となる。有限であり、相対であり、無常（変化）の世界である。第二段階の世界に属するものは全て「物に本末あり、事に終始あり（大生）」という相対の世界であり、しかも全ては動的であって変化こそがその本質である。無機物の世界であり、死の世界である。

第三段階は生物の世界である。第二段階の無機物の世界から有機物が生まれ、その一部に生物が生まれる。その中の一つが我々人類である。人類の内、自己の生命の本源に「無限の宇宙」を自覚する人間が、絶対・無限・全能・永遠と自己との関係性に同根と同一性を発見する。先哲はこれを「悟り」や「解脱」と言った。この第三段階が、一般的に言う「生」の世界である。それは第二段階（死の世界）から生じたものであり、従って、死は生の母である。「生」とは、第一段階の無限・絶対の世界に向かつて、相対界を脱却する過程を指す言葉である。無限から有限は生じ、有限はまた無限に還っていく。宇宙（大生命）は、不断の創造・維持・破壊の再生産、循環である。これらは一つである。

これが「生命」の三段階の世界の自覚であり、生命の意義である。「どうせ死ぬのだから、人生というのは死ぬまでの暇つぶしだ」等と浅はかなことを考えたり、人生に絶望したりするのは、無限・永遠等、我々の根源たる第一段階の世界との繋がりを見出さず、第三段階の世界の身で物事を考えるからである。第二段階と第三段階の有限の世界は、第一段階の無限の世界のほんの一部でしかないのである。

・ 第一段階の世界（無限の遠心力（陰）の宇宙）の別名↓神、仏、無限、永遠、太極、大生命、無、空等。

・ 第二段階の世界（無機、変化、有限の求心力（陽）の世界）の別名↓物質世界、諸行無常、浮世、人生、人の世界、大自然の世界等。

第二段階と第三段階に浸透している第一段階の世界の別名↓道、法、陰陽等。

・ 第三段階の世界（有機、生物、有限の求心力（陽）の世界）の別名↓生命の世界、現世、人生、人の世界等。この世界で、道や法を説いて人間を導く者を、僧侶、君子、聖人等と呼ぶ。「仏法僧」とは、この第一、第二、第三の世界のことである。

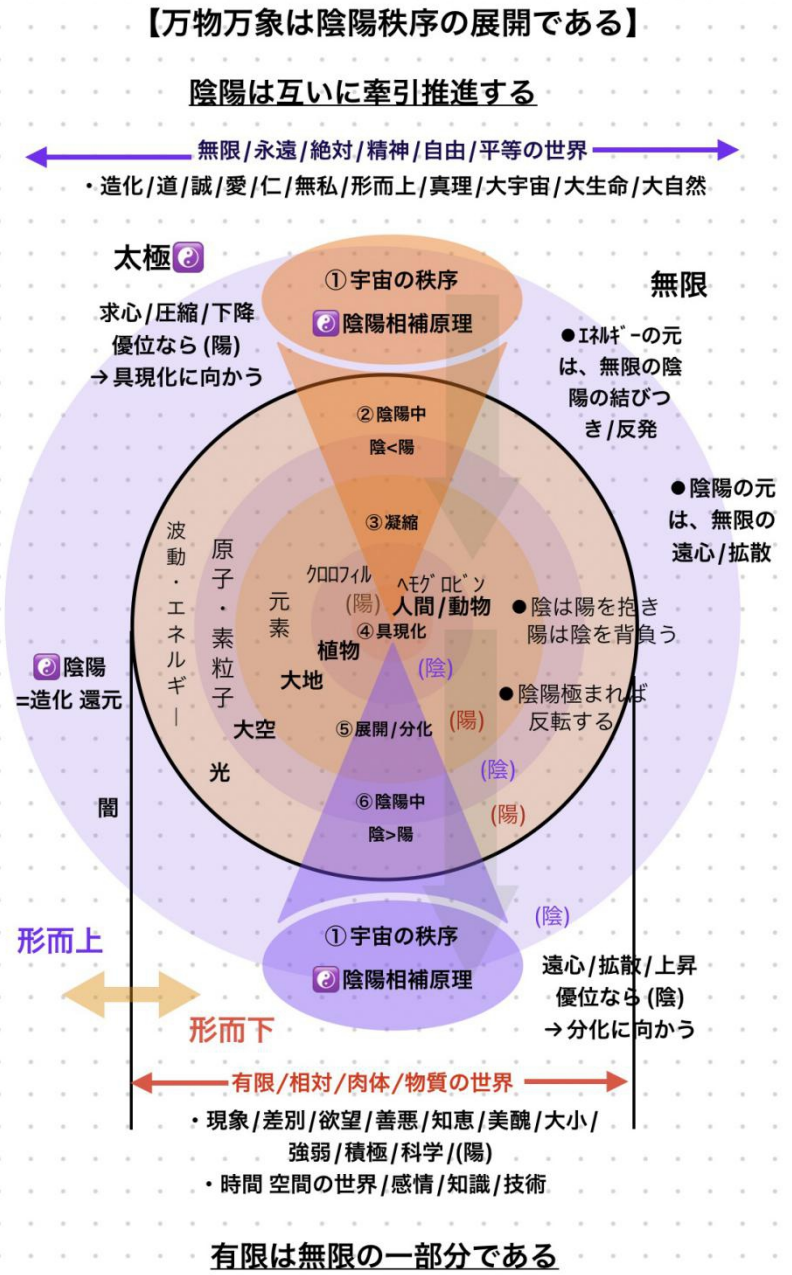
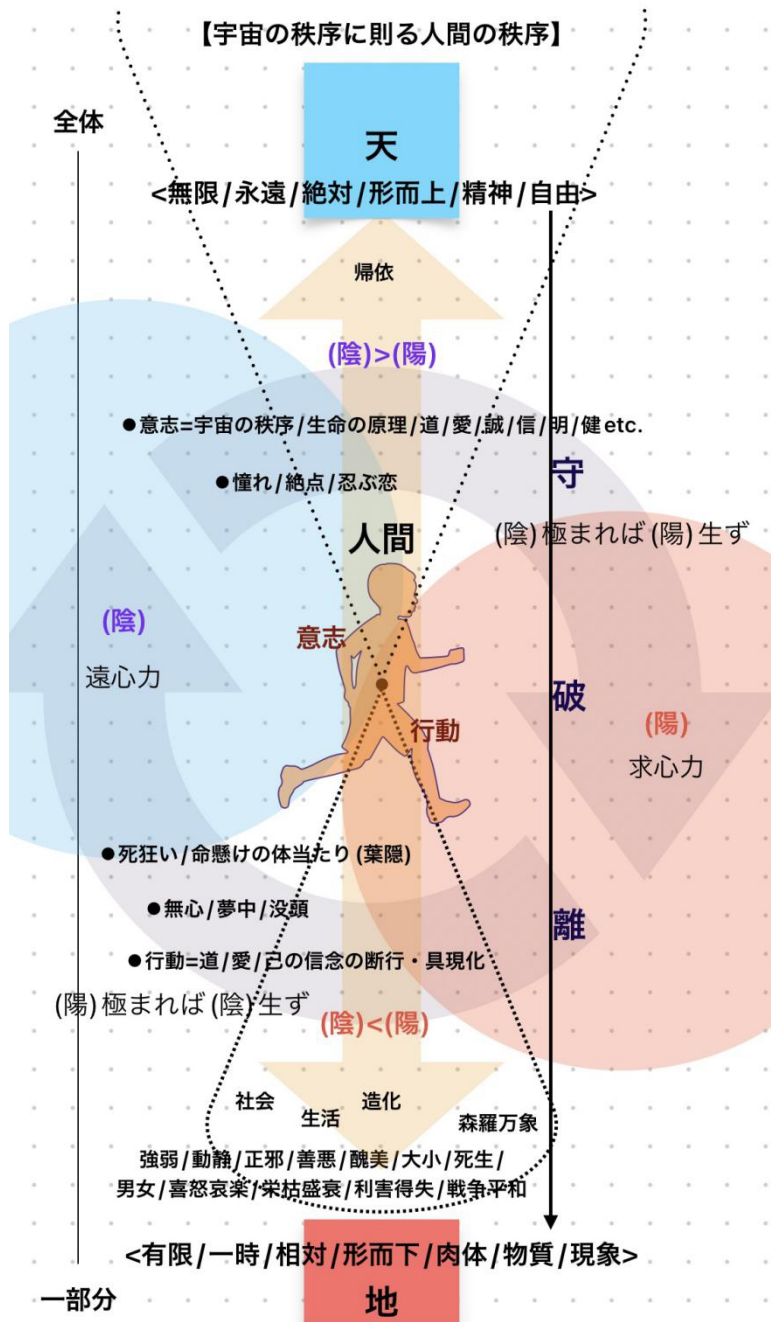
※但し、キリスト教を代表する西洋人の哲学では、宇宙とは第一段階の世界ではな

く、第二段階の物質世界のことであり、無限とは広がり無限ではなく、分析の無限である。彼らの神とは、第二段階の世界の王者であり「造物主」であると解釈される。第一段階の世界での「神」とは、造化の道であり宇宙の秩序であり大生命であり因果律であり、むすび（産霊）であり、言霊（物事を生み、動かし、変化させ、滅ぼし、また再生産する原理）である。従って、神を人格化したり、名前を付けたたり、姿を定めたり、祈りの対象とするのは、神を第一段階の世界ではなく、第二段階の世界へ下ろして認識することになるので、同じ「神」という言葉ではあってもその内実は異なることに注意する必要がある。

世界観を掴めば、無限と有限の関係性が分かる。見えないものが見えるものを支えているというこの世の構造が分かる。世界の様々な宗教や哲学や思想の本質が分かる。人類先哲の偉大な魂が何を指向してきたのか分かる。古典も読める。老子や中庸は深く理解できる。「老子」が、無限・永遠・絶対・大生命・大霊力・大宇宙・造化・全能たる「全き一」を、「道」を通してここまで表現できるとは、畏敬と畏怖の念を抱く以外にない。「中庸」はこれを「誠」という。誠とは幸福・健康・自由・平和の別名である。論語は、孔子の弟子たちの編纂により、かえって孔子の思想が枝葉に流れってしまった感がある。易経は、形而上の話と形而下の話をごっちゃにして、陰陽の本質的性質を分かりにくくしてしまっている。伏羲が示してくれた両儀、四象、そして展開したとしても八卦までで止めておけば良かったのではないか。六十四卦と十翼では複雑難解になり過ぎて、皆の実用的実践的な指導原理にはなれない。わざと複雑・高遠にして神秘さを演出したのではないかと疑ってしまう。極端に言えば、易は両儀と繫辞伝だけでよかった。易は簡素な原理なのである。デカルトの物心二元論は致命的だ。確かに解剖学は二元論のおかげで発達した。が、思想は退化してしまった。肉体と精神は別々ではなく、精神（無限）のごく一部として肉体（有限）がある。物心は二元的一元論であって二元論を土台とすべきではない。「我思う、ゆえに我あり」と言ったが、柳宗悦の言うように「神思う、ゆえに我あり」の方が本質を衝いている。シェイクスピアは世界観を会得している。古事記を書いた太安万侶と稗田阿礼も世界観を会得している。が、古事記伝を遺してくれた本居宣長は、彼の師である賀茂真淵と違って易と陰陽相補原理を無視してしまった。国学者たる誇りがそういう態度をとらせたのかもしれない。

次回は、世界観を支える根本原理（陰陽相補原理）へと話を進める。

今月も健康と健闘を。



Group